

With コロナ時代の「ある高齢者施設」での出来事

成田 研一 (なりた けんいち/関西グループ)

新型コロナウイルス禍がなかなか収束する気配がない。それどころかヨーロッパ諸国では、再び感染が急速に広がりつつあるという。日本ではこれからインフルエンザの流行期とも重なりどうなっていくのか、不安に思う今日この頃である。

私の入居している老人ホームでは、外来者や入居者の施設への出入りをかなり厳しく制限、チェックしているためか、幸いこれまで問題となる事態は発生していない。しかし最近、施設内の雰囲気は何となく重苦しく明るさがなくなってきたように感じられる。

このホームでは、毎月アクティビティ・カレンダーが作成され、毎日午後2時～3時の間に体操、音楽、映画鑑賞、各種のゲームや脳トレなどが実施されている。特に音楽については、外来のボランティアがピアノを弾きに来て皆で楽しく歌ったり、各種器楽演奏を聴いたり、人気のアクティビティとなっていて参加者も多かった。ところがコロナ禍が始まった今年の3月以降、ピアノに合わせて皆でうたうことがなくなり、ダイニングルームに置かれた立派なグランドピアノの音が響くことはなくなったままであった。

「音楽療法」という言葉をご存じの方もあられると思うが、音楽の持つ特性を利用して、高齢者施設などで入居者の健康の維持・回復や精神面での機能改善を図る目的で行われるもので、「音楽療法士」という民間資格もある。

何とか外来のボランティアに頼ることなくホーム内のみで歌を唄ったり音楽を聴いたりすることが出来れば、入居者の心も晴れてホーム内の雰囲気が少しは明るくなるのでは…と考えていたところ、何気ない会

話の中で施設の女性スタッフの一人(Aさん)がピアノを弾けることが判明、早速彼女と相談しホーム長の了解を得て歌の会を立ち上げることにした。何と以前Aさんは他の高齢者施設で「音楽療法士」として働いていたとのこと、打ってつけの人がすぐ傍にいてくれたのだ。4月、5月と季節を唄った童謡、抒情歌、外国民謡、歌謡曲、フォークソング等でプログラムを組み、入居者の皆さんが喜んで歌い、順調なスタートを切ったかのように見えた。

ところが、6月になってホーム側から、皆で大きな声で歌うことは暫くご遠慮願いたいとの要請があった。どうやら施設を運営する本部からの全国的なお達しのようなのであった。「折角立ち上げた歌の会なのに何としたことか?!」不満は残ったが、いつか歌える日も来るだろうとそれまで辛抱することにした。

そこで6月からは、本来皆で歌いたい曲を中心に、ピアノ演奏にハーモニカ、リコーダーも加えてピアノバージョンのプログラムを組むことにした。NHK朝の連続ドラマ「エール」の古関裕而の曲シリーズも組み込んだ。最近ホームに入居した女性(Fさん)もピアノが弾けるので、A・Fコンビのピアノ連弾も可能となり、プログラムの内容に厚みが増したのは不幸中の幸いであった。それにしても、歌好きの入居者みんなで声をそろえて歌える日は何時になったら来るのだろうか。

新型コロナウイルスワクチンの研究開発も急がれるところだが、今回の小さな出来事でさえ地球環境問題として大きな目で見え、われわれ日常生活の在り方にもいろいろ創意工夫を加えることが求められているのだろう。